今無量の感に耐えない。心理臨床家の資格認定，卒後教育および養成課程，症例を中心とする相互研修などといった多くの課題が山積する。この切磋琢磨の中から明日の心理臨床家のあるべき姿を問いつづけていくことが要請されているといってよい。

5）心理臨床家の原点を，病院臨床の中に位置づけていこうとするのは，精神医学教室の中で，臨床心理学を学びはじめた私にとってのゆるぎがたい信念のひとつでもある。多くの問題をはらみながら，多様な実践活動をつづけている，私どもの周囲の病院臨床に従事する心理臨床家の個々の実践記録に即して，いくたびかの討論をつづけてきた。誠信書房から，57年10月刊行される予定になっている「心理臨床家―― 病院臨床の実践――」（池田博和，渡辺雄三との共編）は，これまでの成果を世に問うための一里塚ともいうことができる。

6）学生相談活動の面からは，この年もまた恒例の全国規模における第15回の研究会議が57年1月，筑波大学において開催された。冒頭シンポジウム「新入試制度に伴う学生の意識と諸問題」での司会をつとめ，共通一次試験制度の検討，特に推薦入学制度をめぐっての提言をうけた上，この制度前後の学生の適応状況の変容が真摯に討議された。いつにかわらぬ全国同学の士のカウンセリング・マインドに，深い敬意を表したい。

名古屋大学における学生エンカウンター・グループは，56年度も秋気いよいよ深まろうとする10月，中津川共同研修センターにおいて昨年にひきつづき第5回目を実施した。今までのファシリテーター・グループに，新たに現相談室長としての加藤雄一氏が加わって，4人で取り組むことになったこと，さらにたまたま昨年度教育心理学科研究生として西独から留学していたDoris女史がこのグループに参加し，国際的色彩を帯びたグループとなったことなどが印象的であった。言葉のハンディキャップをこえ，人間は人間同志，国籍こえてかかわりあうことの可能性を実感することが出来たのも，心うたれて忘れがたい思いである。

7）57年4月，はからずも名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校の校長を併任することになった。その任にふさわしくないことを十分承知しながら，やむを得ず，その役割をになって4ケ月経過した。ようやく馴れてきた段階にすぎないが，若い生徒諸君との出会いは新鮮であり，現場での教育活動はまさに活気にみちあふれ，新しい体験を得た喜びは何ものにもかえがたい。ひとりひとりの成長を心から期待しながら，人間管理の校長でなく，人間理解の校長でありたいとみずから決意している昨今である。

（昭和57年8月19日）

研　究　報　告　概　要

丸　井　文　男

1. 約2年前にはじめたロンドン大学のラター教授とノースカロライナ大学のショプラー教授編著の訳出は，分担者の変更や，多忙さもありおくれ，漸く昭和57年4月刊行をみた。1976年にスイスで行なわれた当時の自閉症研究の第一線の研究者のシンポジウムの討論をもとにした論文の総合的集大成されたもので，この本を監訳出来たことは大きな意議をもっていると思っている。

2. そのためか，既に4年越しになっているわれわれ自閉症研究グループの10年以上に亘る研究の総まとめの著書は，まだ，最終的に原稿が集まっていない。編著書としていろいろ責任を感じているが，グループ研究の性格をいかすとなるとなかなかむずかしいことになる。しかし，なるべく早く刊行をしたいと念じている。

3. われわれの自閉症研究も10数年になり，長期追跡研究のまとめをあらたに実施しつつあるが，この研究計画を立てつつある段階で2年計画にならざるを得ない。

4. 個人的には，長年あたためている成因論の再検討も考察しているが，雑用が多く遅々としてすすまない。なんとか早くまとめたい心境である。